

草稿からの分化、作品生成へ

——大岡昇平「出征」と『野火』——

花 崎 育 代

よく知られているように、大岡昇平（明42（一九〇九）～昭63（一九八八））は戦前より、批評家、スタンダール研究者であったが、小説家としての本格的な活動は戦後になってからである。一兵卒としてフィリピンに赴き、俘虜を経て昭和二十年十二月に復員、『俘虜記』（合本となったものの初出 昭23・2～昭26・1）、『武蔵野夫人』（昭25・1～9）、『野火』（昭23・12、昭24・7。昭26・1～8）と、

自らもその体験を持った一兵卒や復員兵を主要人物とした作品を発表した。

その一方で大岡は、「海上にて」（昭24・12）、「出征」（昭25・1）、「ユー・アー・ヘヴィ」（昭28・5）など、主に後に『サンホセの聖母』（昭25・6）、『ミンドロ島ふたたび』（昭44・12）などを経て、『ある補充兵の戦い』（昭52・12）に収録されることになる作品群を発表している。出征、戦場、俘虜になるまで、に関して、『俘虜記』に重ならず、かつ大岡と呼ばれる「私」を主人公としない『野火』とも異なる、という作品群である。

上記すべての作品群によって大岡は作家としての地歩を固めてい

くことになるのだが、復員以降明石での疎開時代の記述として昭和二十一年から二十三年はじめまでを公表した「疎開日記」（原題「私の文学手帖」、昭28・9）にも明らかのように、これらはみな戦後の同時期に構想されている。

ここ数年、筆者は大岡昇平の自筆資料のうち、主に神奈川近代文学館所蔵の『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』に関するものを調査してきた。その結果、右記の作品が、それぞれの特性をもって分化していくさまざま見出すことが可能となった。

ここでは『野火』の草稿としてまとめられている資料を検討することで、とくに、大岡の実体験に近いと思われる作品といえる「出征」と、より創作的要素を強めた主人公を田村とする『野火』との分化を考察していくこととする。

なお大岡昇平の自筆資料については、著作権継承者である遺族により出版は認められていないため、影印の掲載や全文の翻刻はかなわないが、撮影による詳細な調査は許可を得ている。本稿では、資料の摘み食いの渉猟ならぬよう留意しつつ、部分的に掲出し検討していく。

『野火』草稿として神奈川近代文学館に収蔵されているのは、以下のものである。

- (一) B 5版20×10 「創元社原稿」用紙九枚(右上欄外に「1」)
 (二) B 4版20×20 「展望」稿以降の現行『野火』冒頭部に該当する部分。
 (三) B 4版20×20 「フランス映画」原稿用紙三枚(右上欄外に「26」)、「28」)。
 (四) B 4版20×20 原稿用紙二枚(右上欄外に「41」、「42」)。
 (五) B 4版20×20 「銀星閣箋」九枚(右上欄外に「77」)、「86」)。
 「79」は存在せず)。

なお、「78」および「86」の裏面には横書きで「17 oct 1948」の記載がある。

このうち本稿では、(三)の「41」、「42」について考察していくこととする。⁽¹⁾

*

『野火』草稿「41」、「42」

(一行二〇字で示す。欄外表記の／は改行。■は判読不能。)

〔41〕

■内臓の受けたやうな、^{一種の空虚な} 圧迫感とでもいふほ
 かはない。我々は我々は日常の関心事に身をかまわねる。

任せてゐる。ふと何かの動作の間に、「あ、

しかし自分はずぐ死ぬんだ」といふ■考へが浮ぶ。眼にうつるそのはすべて一種特別な色合を帯びて来る。例へば光つたものは一層光り、影は一層暗くなわやうな幻覚である。その感覚は決して不愉快ではない。

門司■滞在中私が■私は或る時の感覚を憶へてゐる。我々は下士官に引率されて、海峡の東に突した小さな岬の先の神社まで行つた演習に行つたことがある。水路はそのあたりで著しく狭く潮流は急で、下る舟は速く■つて行つた。対岸にはコークリートの護岸され、「壇之浦古戦場」と大きくペンキで書いてあつた。崖上の道を木炭バスがのろのろ通つて行つた。

休憩の時私は 岬の先の岩に腰を下し、ほんやり目の前の水を眺めた。そこには一尺ほどの小さな岩が水面に表はれ、透明な水はそれが底の岩床が

〔42〕

隆起してゐるさまを、はつきり示してゐた。弱い■がその岩に当つて、小さな沫をあげてゐた。

私はその單調な水の動きを見ながら考へた。私■は死んでも無になつてしまふわけではない。私の意識はたしかに無になるであらうが、

その意識のもとをなしてゐる私の肉体は、いくつかの元素に分解して地球上に存続し続けるのである。大部分の水からなるといふ我々の肉体の一部は、多分水となつて、例へば今見る水のやうになつて動き続けるであらう。

私の心は少し慰められた。私は自分が水になると空想して慰められるのは、今見てゐる水が動きつゝあるからであらうと空想した。

☆☆

二十七日我々は輸送船^{第二}玉津丸に乗船した。

我々が門司にゐる間に、我々を解散せしめるといふ議があつたらしい。現地参謀は我々のやうな訓練装備の劣つた兵隊は要らない、と現地からいつて来たからださうである。噂は

(傍点は原文通り)

☆☆……………「動きつゝある」の部分^を朱鉛筆で丸囲み。

☆☆……………一行分に「V」(挿入記号)があり上部欄外に「二行ア■」。ただし実際には一行のみ空欄。

☆☆☆☆……………上部欄外「銃のことを」前に

以上が草稿「41」、「42」である。

三

この草稿には、公刊された大岡作品の少なくとも二作品の部分が

存在していることがわかる。逆に言えば、つまり「草稿」から初出以降公刊本文へ、という時間的順序を考えれば、右の草稿から、少なくとも二つの作品が生成されたということが出来る。

その二作とは『野火』と、そして「出征」である。

右の原稿の記述に沿つて該当部分を掲げてみることにしよう。

まず「41」最初からの部分に該当する作品は、「出征」(昭25・1)である。ただし、「41」一行目から八行目、そして飛んで、「42」一行アキの後、一六行目から、である。

「41」のはじめ、草稿一升目は判読不明削除から始まっているが、これを除いた部分から、公刊本文を、やや煩瑣ではあるが引用しておく。(「」は改行。) なお網掛け部分はこの草稿には存在しない箇所である。

内臓を抜かれたやうな、一種の虚脱した圧迫感とでもいふほかはない。無論一日の大半は日常の関心事にかまけてゐる。ふと何かの動作の間に、あゝしかし自分はどうすぐ死ぬんだといふ考へが浮ぶ。外界はその時すべて特別な色合を帯びて来る。例へば光るものは一層光り、影は一層暗く、物音が遠くなつたやうに感じる。しかしこの感覚はそれほど不快ではない。この快い予感の結末はしかし、比島の山中でマリリアのため敵前で落伍して、死と直面した時の強い圧迫感であつた。何かまはりからどうともならないものにしめつけられるやうな感覚である。殺される者が殺人者に直面して、遁れられないことを観念した時、或ひはかういふ感覚を味ふかも知れない。しかし私はこの時、前方から来る米軍に殺されるとは少しも感じなかつた。／＼「一行アキ」花崎注」／＼二十七日我々は輸送船第二玉津丸に

乗船した。我々は門司で解散されるといふ噂があつたらしい。我々のやうな弱兵は要らないと現地参謀がいつて来たからださうである。噂は

〔出征〕、『新潮』昭25・1)

なお、草稿「41」の一〇〜一二行「我々は演習に行つたことがある。」に相当すると思われる箇所も公刊された「出征」のこの箇所直前にある。引用しておく。

昼間は演習があつた。裏山の小学校や神社の庭で、初歩の戦闘訓練をやつた。

ただしこれに続く公刊された本文は、「下士官達は我々の演習振りを見て「こんな程度の悪い兵隊と一緒に رفتんぢや、今度は助からない」と思つたさうである。」であり、軍―戦争―戦場に関しての、きわめて現実的な問題が記されていくのである。水に関して「憶へてゐる」きわめて個人的な、固有の「或る時の感覚」が「出征」に記されることはなかつた。

そしてその「感覚」として「水」を眺めながら記されていく「空想」は、「野火」〔『文體』昭24・7、『展望』昭26・1〕「六川」〔昭27・2、単行以下現行「八川」の章〕の次の記述にみることが出来る。ひとり山中彷徨する「私」田村の想念が記されている場面である。

草稿「42」四行目から一四行目に近似した部分が左である。

死は既に観念ではなく、映像となつて近づいて来た。私はこの流れの岸で、手榴弾により四肢を四散させて死んだ自分の姿を想像した。それはやがて腐り、様々の元素に分解するであらう、三分の二は水から成るといふ我々の肉体は、やはり水とな

つて流れ出してしまふであらう。／私は改めて目の前に流れる水に眺め入つた。それは私が少年の時から幾年も聞き馴れた囁く音を立てて流れてゐた。石を越え、或ひは迂回して、後から後から忙しく現はれて来た。それは無限に続く運動のやうに見えた。／私は満足した。私の苦しい意識はたしかに無となるに違ひないが、私の肉体は宇宙といふ大物質に溶け込んで、いつでも存在を続けるであらう。特に私を慰めたのは、この水の動いてゐることであつた。(傍点原文)

〔鶏と塩と「野火」の2〕、『文體』昭24・7)

すでに述べたことがあるので詳述はしないが、この「川」の章は無生物の水に生物たる人間「私」が同化していく「想像」を述べるのに、擬人法や対句表現などを駆使してその「私を慰めた」「想像」のぎりぎりまでを、いわば修辭学的に論理的に示していた。すなわち、この引用の直前の部分、「流れは暗い林に入り、道は林を迂回した。」の部分に端的に表れているように、まず対句表現で、ここで重要な外界が流れ―水と道であることを述べるなどして、考察の範囲を限定し、さらに、擬人法で無生物である道や川を入つたり迂回したりする人⇨生物になぞらえる。無生物を生物のように表現しているのである。さらには右に引用した部分に直接する部分では、「私」の肉体をまず対句表現で「足首は」「手も」と部品であるかのように限定し、「足首」については比喩表現で擬人法とは逆といえる直喩を用いて「鶏の足のやうに」と、「私」をいわば万物の頂点といった地点から引きずりおろして示しているのである。

こうした修辭的論理の整つた上でなければ、「想像」を語らせない、そうした一文が、やがて狂気に陥る田村を主人公とした作品で

記されている。そのことの一端に、大岡が『野火』を、「出征」のような、すなわち大岡に近い人物「私」の行動と思索を織り交ぜる『俘虜記』にもみられる自伝的作品と、未分化の状態で作成していた段階があった、といえるのである。

それでも草稿からの「出征」と『野火』への分化のありようは、おのおの作品の方向を決めていったと言えよう。むろん「出征」の千人針に関する記述³⁾、想像⁴⁾で記したとおもわれる部分は存在する。しかし明らかかなように、たとえばこの千人針の創出は、妻と「私」との人間関係の強度を表象すべく行われた創出である。『野火』におけるものとは別種のものである。すなわち、『野火』においては、「孤独な敗兵の裏切られた社会的感情」(『文體』昭24・7)を抱かざるを得なかった孤独な田村が、さらに「社会的感情」に痛打を受けることになるのであり、人間関係を希求し、齎されるべき死を前に求めた慰撫こそが、「想像」としてあらわれているのである。あくまで孤独で人間関係を求めながら死なねばならない状況において「水」として「存在し続ける」という「想像」は活かされているといえよう。

以上、神奈川近代文学館所蔵大岡昇平の草稿『野火』のうち「41」、「42」を検討してきた。みてきたようにむろん、雑誌公刊段階であってもたとえば「出征」(昭25・1)で用いつつ最終的に「野火」(『展望』昭26)で用いたので、発表時期としては後出の『野火』の草稿としてまとめられているのであろうことの蓋然性は高い。そしてこの「41」、「42」は、同一のつらなりの中から、人間関係の中で批評的に現実を見つめる「出征」と、ぎりぎりまで修辭的論理を通してながら、孤独な死が意識される中で、それを慰撫するものとしての

「想像」を記す『野火』とに分化していったのだといえるのである。

注1) なお、『野火』草稿として当該文学館に収蔵されているもののうち、

(四)の部分については、拙稿「大岡昇平『野火』草稿にみる『俘虜記』との分岐、差異化と生成―「動物的」な「恐怖」「愛情」から「社会的感情」―「生物学的感情」へ」(『立命館文学』第六三〇号、平25・2)にて考察を試みた。

(2) 拙稿「大岡昇平―戦後の文體」(平7・3、大屋幸世・神田由美子・松村友規編、東京堂出版『スタイルの文学史』所収)。なお『野火』の比喩の夥しさについては夙に丸谷才一「文體とレトリック」(『中央公論』昭51・12)が具体的に指摘している。

(3) 大岡は千人針に関する記述について、たとえば埴谷雄高との対談「二つの同時代史」(『世界』昭57・10。岩波書店、昭59・7刊)で、「物理的に不可能だった」「フィクションだよ」と述べるなど、体験的事実ではないと表明している。こうしたことの虚実を問うのは興味深いとはいえようが、一方で、少なくとも作品「出征」においては、いわゆる「事実」か、創作か、といった詮索が小説の読みにおいてあまり建設的でないことを示している。このあたりについては拙稿「大岡昇平の〈千人針〉」(『湘南文学』(湘南短期大学)第9号、平8・1)で論じたことがある。

(4) 該文学館所蔵の大岡手稿のなかに「創作メモ 野火」がある。「満寿屋」製B4版20×20原稿用紙に升目にこだわらずに横書きで記している。その「テーマ」を記した箇所に「僚友に会ひたい」との記述がある。また大岡は『野火』の意図(昭28・10)で、「どんな時でも人間は同類と一緒にいたい」と述べている。

特記しない限り括弧内の年月日は初出発表時、また大岡昇平の著作からの引用は『大岡昇平全集』全二三巻別巻一（平6・10〜平15・8、筑摩書房）に拠っている。なお公刊されているものに関しては旧字を新字にあらためた。

本稿は文部科学省科学技術研究費補助金採択課題「大岡昇平文学の基礎的および総合的研究―構想ノート・草稿類を含む―」（基盤研究C、研究課題番号21520217、代表 花崎育代）の研究課題の一部を含むものである。

受贈雑誌（六）

近松研究所紀要	園田学園女子大学近松研究所
中央大学国文	中央大学国文学会
鶴見大学紀要	鶴見大学
鶴見日本文学	鶴見大学大学院日本文学専攻
帝京日本文化論集	帝京大学国語国文学会
帝京大学文学部紀要	帝京大学文学部日本文化学科
東海学園言語・文学・文化	東海学園大学日本文化学会
東海大学日本語・日本文学研究と注釈	東海大学研究と注釈の会
東京女子大学日本文学	東京女子大学日本文学研究室
東京大学国文学論集	東京大学文学部国文学研究室
常葉国文	常葉学園短期大学国文学会
同志社国文学	同志社大学国文学会
同志社女子大学日本語日本文学	同志社女子大学日本語日本文学会
東北文学の世界	盛岡大学文学部日本文学科
徳島大学国語国文学	徳島大学国語国文学会
都大論究	東京都立大学国語国文学会
名古屋大学国語国文学	名古屋大学国語国文学会
奈良大学紀要	奈良大学
南山大学日本文化学科論集	南山大学日本文化学科
二松	二松学舎大学大学院文学研究科